妊娠末期の「夫婦関係」の実態と関連要因の検討

渡邉　由加利
札幌市立大学看護学部

抄録：本研究の目的は，妊娠末期にある妻と夫からみた夫婦関係の実態と夫婦関係に関連する要因について分析することである．対象は，初妊婦とその夫で妻 224 名，夫 177 名であった．調査方法は，自記式質問紙法で，質問紙の内容は，夫婦関係（結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度，意見の不一致時の対処，共同行動，会話時間，出産育児の会話，家事），結婚と妊娠の状態，身体的・心理的状態である．調査の結果，夫の結婚満足度は妻より有意に高かった（p ＝ .000）．妻と夫いずれも情緒的関係は高得点であった．妻と夫いずれも結婚満足度と情緒的関係が他の要因に比べ高い関連があり（妻 r_s=.603，夫 r_s=.500），夫婦間の情緒的関係は，妊娠期の夫婦関係において中核となる要因であり，情緒的関係に視点をおいた援助の重要性が示唆された．

キーワード：夫婦関係　妊娠期　結婚満足度　情緒的関係

Marital Relationships in the Third Trimester of Pregnancy and Related Factors

Yukari Watanabe
School of Nursing, Sapporo City University

Abstract: The purpose of this study is to obtain a clear state of marital relationships and to examine the relevant factors related to marital relationships during the third trimester of pregnancy. The subjects of this study were 224 wives and 177 husbands in the last phase of their first pregnancy. The research method used was a questionnaire. The contents of the questionnaire included their marital relationship (marital satisfaction, emotional relationship, marital consensus, joint actions, length of conversations, conversations on birth and raising the baby, household chores), the current condition of their marriage and pregnancy, and physical/mental conditions. The result of the marital satisfaction of husbands significantly higher than that of wives (p=.000). The emotional relationship between the husband and the wife scored highly. A rather substantial correlation was visible between marital satisfaction and the emotional relationship. (Wife: r_s=.603, Husband: r_s=.500) . Since the emotional relationship between the husband and the wife was related to these factors, it is thought to be important for the couple to have assistance to build on the emotional relationship between them.

Keywords: Marital relationship, Pregnancy, Marital satisfaction, Emotional relationship

Ⅰ．緒言

1．研究の背景

妊娠・出産・育児は，妻と夫各々にとって，身体的，心理・社会的に様々な影響を及ぼすことから，幸福であると同時にストレスが生じやすい出来事といわれている[1]．母親の育児不安や児童虐待が社会問題となり，母親の心理・社会的側面が注目されるようになってきた[2-3]．女性が心理的に安定した状態で，養育性を獲得するためには，自分の生き方に母親の役割をどのように関連させていくかというアイデンティティの課題や，夫との関係が重要であることが明らかにされている[4-6]．これまで，日本における夫婦関係に関する調査は，主に育児期の妻に焦点が当てられてきた．その中で，妻の心理状態や育児不安には，夫からの支援（家事・育児・情緒的支援）が関連しており，特に情緒的支援の重要性が示唆されている[7-9]．一方，夫を対象とした調査は，父性意識や父親の役割取得過程を検討したものが多く[10-14]，妊娠中の夫の心理状態や夫が捉える妻との関係の実態に関しては，十分に明らかにされていない．更に家族の中核となる夫婦の関係を妻と夫の結婚満足度や情緒的関係，家事支援などの要因からの包括的に調査したものや妊娠期の夫婦に焦点をあてた調査は十分になされていない．

妊娠期，特に妊娠末期は妻の腹部増大に伴う心身の負担，出産や育児への不安によってストレスが高まる時期であり，そ

れが夫婦の生活に影響を及ぼし，夫婦間の役割の調整が必要となる．そのため，二人の間に意見の不一致や葛藤が生じやすくなる時期といわれている[15]．

このように，妊娠は妻だけではなく，夫にとってもストレスになりやすいことから夫婦で対処することが重要であり，それが，妻と夫の心理的な安定や夫婦関係の満足につながっていくと考える．さらに，妊娠中の夫婦関係は，親役割の取得やその後の夫婦関係にも影響を及ぼすことから[16-18]，妊娠期にある夫婦関係の実態や夫婦関係に関連する要因を探ることは，安定した夫婦関係を中心とした家族支援の方向性を検討するための重要な視点であると考える．

2．文献概観

1）夫婦関係を評価する測定尺度

夫婦関係に関する研究は，欧米では1960年代から行われており，夫婦関係を測定する指標や尺度が多数開発されている．日本の夫婦関係の研究は，晩婚化・離婚率の増加・少子化・育児不安の増大など，結婚や家族をめぐる問題を背景に，1990年代に入ってから社会学や心理学の分野で行われてきている[19-22]．夫婦関係の評価に用いられる尺度は，夫婦関係を多側面から測定する尺度と総括的に評価する尺度がある．多側面型の測定尺度は，結婚生活に対する総合評価，夫婦間の意見の一致度，相互調整，共同活動の程度，家にいる時間の愛好度，配偶者に対する満足度，配偶者への信頼度など多数の項目から評価するものである[23-25]．一方，多側面型尺度の測定上の批判（尺度の構造上の問題，スコアリングの問題）から，夫婦関係の評価を，夫婦関係や結婚生活に対する総括的評価とその評価を規定する説明変数群（意見の一致度や共同活動の頻度など）に分けて測定する必要性が指摘されており[26]，測定上の問題が課題とされている．

2）親になる移行期にある夫婦関係

子どもの誕生は，夫婦関係に様々な影響を及ぼすことが明らかにされ，移行期にある妻と夫の夫婦関係に関連する要因が検討されている．第1の要因は，妊娠，育児によって生じるストレスである．このストレスが，夫婦関係にネガティブに影響する．具体的には身体的ストレス（つわりや腹部増大などの体調の変化に伴う苦痛，身体的な疲労など），心理的ストレス（親になることや子どもに対する不安，妊娠異常への不安など），生活の変化にかかわるストレス（妻の退職，外出や趣味の制限，家事が思うようにできないなど），経済的なストレス（妻の退職，出産育児の準備など），人間関係的ストレス（子どもの誕生前のようにパートナーに注意や関心を向けることができなくなる，パートナーに対して家事を今まで以上に分担して欲しいというニーズの増加，役割分担の再調整をめぐっての意見の不一致，性的な反応の低下，友人との付き合いの制限）などである[15]．

第2の要因は，変化に対する夫婦の対処の問題である．前述のように妊娠や育児は妻と夫にストレスをひきおこしやすい出来事といわれている．しかし，このようなストレスにもかかわらず，全ての夫婦の満足度が低下するわけではなく，子どもの誕生後も夫婦関係の満足度がさほど低下しなかったカップルもいることが報告されている[15・17]．また，子どもの出生前に，生活の変化に対処しているカップルは，子どもの出産後も夫婦間の役割調整において効果の高い戦略をとりやすく，夫婦の間で再調整がうまくいけば，満足度は影響されず，むしろ夫婦間のコンセンサスは増加する[15-18]と言われている．

第3の要因は，夫婦間のコミュニケーションである．夫婦関係の満足度は，コミュニケーションが多いほど高くなり，子どもの存在がコミュニケーションの時間を奪い，その結果，夫婦関係の満足度が低くなることが明らかにされている[27]．すなわち，子どもの存在自体が夫婦関係の満足度を低下させるのではなく，コミュニケーションが少ないことが満足度に影響するということである．また，夫婦関係の満足度が高い場合，夫婦間のコミュニケーションも高いという逆の関係も見出されている[28]．

以上，文献検討の結果から，本研究では多側面型尺度ではなく，夫婦関係を結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度，意見の不一致時の対処，出産育児の会話，会話時間，共同行動，家事の8つの構成要因と仮定し、夫婦関係の実態をこれら8要因の得点と8要因間の関連性から検討する．さらに，妊娠期のストレス要因として，「結婚時の妊娠の状態（妊娠時の結婚の有無・妊娠の希望）」と「妊娠中の体調の変化や心配」の2点を挙げ，夫婦関係との関連性を探る．

本研究の目的は，1. 妊娠末期にある妻と夫からみた夫婦関係の実態を明らかにすること，2. 夫婦関係に関連している要因について分析することである．

Ⅱ．研究方法

1．用語の定義

夫婦：現在結婚しているもの（事実婚を含む）

夫婦関係：本研究では，結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度，意見の不一致時の対処，出産育児の会話，会話時間，共同行動，家事の8つを構成要因とした．

結婚満足度：結婚に対する総括的な評価であり，「結婚の満足」，「配偶者への満足」，「配偶者との関係の満足」から検討する．

情緒的関係：妻と夫の間の配慮や思いやりなど，主に心理的側面への働きかけとその受けとめであり，「配偶者からの情緒的支援」，「配偶者への情緒的支援」，「配偶者への気持ちの伝達」から検討する．

意見の一致度：妻と夫がお互いの意見がどの程度一致していると捉えているかを，「家事の分担」「家計の取り扱い」「性生活」「自由な時間の過ごし方」「親とのつきあい」「妻の就労」「大切だと思う目標や物事」7 項目から検討する．

出産育児の会話：出産や育児についての会話の頻度と夫が妻の腹部を触る頻度について，「子どものことや育児のことを話す」，「妻のおなかを触る」，「出産のことを話す」3 項目から検討する．

意見の不一致時の対処：妻と夫の間で意見が異なった場合の妻と夫の対応であり，「お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする」，「相手との衝突を避けようとする」，「自分の意見を通そうとする」，「相手の要求に従う」の 4 項目から検討する．

2．研究枠組み（図1）

家族社会学や家族心理学の理論を参考に，夫婦関係を構成する 8 要因（結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度，意見の不一致時の対処，出産育児の会話，会話時間，共同行動，家事）の得点と 8 要因間の関連を検討する．さらに，これら 8 要因に関連する要因を探るため，「結婚と妊娠の状態」，「妊娠中の体調の変化や心配」から検討する枠組みとした．

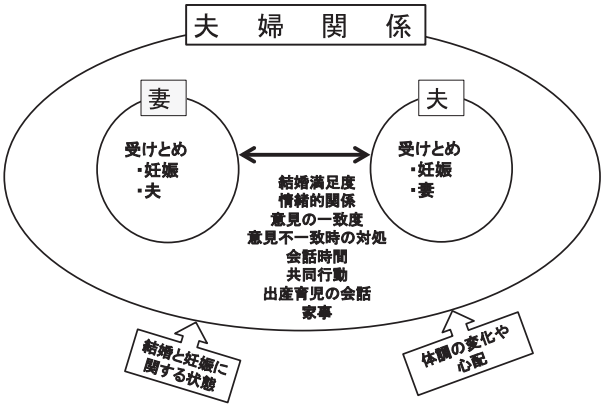

図 1 研究枠組み

3. 研究デザイン

本研究は，自記式質問紙法を用いた横断的調査である．

4. 対象者

札幌市内および近郊の病院の産科外来に通院している妊娠 28 週以降の初妊婦とその夫，および母親学級，両親学級に参加している初妊婦とその夫であり，455 組に調査を依頼した．

5. 調査期間

2004 年 7 月～ 9 月

6. 調査方法

調査者は，実施施設の責任者に研究目的を説明し，調査を依頼した．対象者の来院日時に出向き，対象となる夫婦に研究目的を説明した．夫婦で来院している場合は妻と夫に依頼し，妻だけの場合は妻に了解を得て，夫に質問紙を渡してもらった．質問紙は，自宅で記入し，夫婦別々に郵送によって回収した．

7. 調査項目とその内容

2004 年 6 月に，既に妊娠・出産を体験した夫婦 6 組（12 名）に，調査内容に関する予備調査を行い，質問の順序や理解のしやすさ，回答時間などを検討し，質問紙を構成した．

1) 基本的属性

夫と妻各々の年齢，結婚年齢，家族構成，仕事の有無，世帯収入

2) 結婚と妊娠の状態

妊娠時の結婚の有無，子どもの希望「あなたは子どもがほしいと考えていましたか」を「はい」「いいえ」「どちらでもよかった」で回答をえた．

3) 身体的・心理的状態

・身体的状態：妻の妊娠異常，妻と夫の健康状態を「あなたは最近（ここ 2 ～ 3 年）病気で通院・入院したことはありますか」を「ある」「ない」で回答をえた．

・妊娠中の体調の変化や心配

妻には「妊娠中につらいと思う体調の変化や心配はありますか」を「はい」「いいえ」で，「ご主人は，あなたの妊娠によって，ご主人自身の体調の変化や心配ごと・戸惑いがあると思いますか」を「はい」「いいえ」「わからない」で回答をえた．夫には「あなたは奥様の妊娠によって，あなた自身，戸惑いや心配，体調の変化はあります（た）か」を「はい」「いいえ」で，「奥様は，妊娠によって体調の変化や心配ごとがあると思いますか」を「はい」「いいえ」「わからない」で回答をえた．

4) 夫婦関係を構成する 8 要因の測定項目

(1) 結婚満足度

結婚満足度は，Kansas Marital Satisfaction Scale(KMS) [29・30] を用いた．この尺度は「結婚の満足」，「配偶者への満足」，「配偶者との関係の満足」の 3 項目からなり，その満足度について，1 点（非常に不満足）から 5 点（非常に満足）までの 5 段階尺度で表し，点数が高いほど結婚の満足度が高いことを意味する．

日本語版の尺度の使用にあたっては，訳者の承諾を得た．

(2) 情緒的関係

情緒的関係の測定は，稲葉 [31] の調査項目「配偶者からの情緒的支援」，「配偶者への情緒的支援」と自作の「配偶者への気持ちの伝達」から検討した．

質問内容は，「配偶者からの情緒的支援」4 項目（配偶者は私の心配事や悩み事を聞いてくれる，配偶者は私の能力や努力を高く評価してくれている，配偶者は私に助言やアドバイスをしてくれる，配偶者は私の気持ちや考えを理解してくれる），「配偶者への情緒的支援」4 項目（私は配偶者の心配事

や悩みを聞いている，私は配偶者の能力や努力を高く評価している，私は配偶者に助言やアドバイスをしている，私は配偶者の気持ちや考えを理解している)，「配偶者への気持ちの伝達」3 項目（私は自分の心配事や悩みを配偶者に話している，私は配偶者に対する気持ちや考えを配偶者に話している，私は配偶者に対する希望を配偶者に話している）である．これらの項目について支援の程度を，1 点（あてはまらない）から 4 点（あてはまる）までの 4 段階尺度で表し，得点が高いほど情緒的関係が良い状態であることを意味する．

質問項目の使用にあたっては，作成者の承諾を得た．

(3) 意見の一致度と不一致時の対処

①意見の一致度

意見の一致度は，「家事の分担」「家計の取り扱い」「性生活」「自由な時間の過ごし方」「親とのつきあい」「妻の就労」「大切だと思う目標や物事」7 項目の意見の一致の程度を 1 点（わからない），2 点（かなり不一致），3 点（どちらかといえば不一致），4 点（どちらかといえば一致），5 点（ほぼ一致）の 5 段階尺度で表し，得点が高いほど一致度が高いことを意味し、妊娠前と現在の状態を調査した．

②意見の不一致時の対処

意見が食い違った場合の対処方法は，「お互いに満足するような結論を見つけ出そうとする」（以下，満足する結論），「相手との衝突を避けようとする」，「自分の意見を通そうとする」，「相手の要求に従う」の 4 項目について，1 点（あてはまらない）から 5 点（あてはまる）の 5 段階で表した．

(4) 会話時間，共同行動，出産育児の会話

会話時間は，配偶者との 1 日あたりの平均会話時間を 1 点（ほとんどなし），2 点（30 分くらい），3 点（1 時間くらい），4 点（2 時間以上）の 4 段階で表した．

共同行動は，NFRJ98[32] の調査項目「一緒に夕食をとる」，「一緒に買い物に行く」2 項目に「一緒に趣味やレクリエーションを行う」を加えた 3 項目について実施の頻度を，1 点（ほとんどない），2 点（1 ヶ月に 1 ～ 2 日），3 点（1 週間に 1 日くらい），4 点（1 週間に 2 ～ 3 日），5 点（1 週間に 4 ～ 5 日），6 点（ほぼ毎日）の 6 段階尺度で表し，得点が高いほど共同行動の頻度が高いことを意味する．

共同行動の質問項目の使用にあたっては，日本家族社会学会全国家族調査委員会の承諾を得た．

出産育児の会話は，「子どものことや育児のことを話す」，「妻のおなかを触る」，「出産のことを話す」3 項目の頻度を測定した．1 点（めったにしない）から 4 点（よくする）の 4 段階尺度で表し，得点が高いほど頻度が高いことを意味する．

(5) 家事

家事の実態は，NFRJ98[32] の調査項目「食事の用意」，「洗濯」，「風呂掃除」3 項目に「部屋の掃除」，「買い物」を加えた 5 項目について，1 週間あたりの頻度を 1 点「ほとんど行わない」，2 点「1 週間に 1 回くらい」，3 点「1 週間に 2 ～ 3 回」，4 点「1 週間に 4 ～ 5 回」，5 点「ほぼ毎日」の 5 段階尺度で表し，合計得点を家事の得点とした．得点が高いほど家事の頻度が高いことを意味する．

家事の質問項目の使用にあたっては，日本家族社会学会全国家族調査委員会の承諾を得た．

8. 分析方法

夫婦関係を構成する 8 要因（結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度は妊娠前と現在の状態，意見の不一致時の対処，会話時間，出産育児の会話，会話時間，共同行動は現在の状態）について単純集計を行った．結婚満足度，情緒的関係および意見の一致度の妊娠前と現在の状態の比較は，wilcoxson の符号付き検定を用いた．妻と夫の結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度，意見の不一致時の対処，出産育児の会話，会話時間，共同行動の比較には Mann-whitney 検定を用いた．夫婦関係を構成する 8 要因間の関連性の検討には spearman の順位相関を用いた．なお，変数として「情緒的関係」は「配偶者からの情緒的支援」を，「意見の不一致時の対処」は「満足する結論」を，家事に関する変数は，妻は「妻からみた夫の家事」，夫は「夫の家事」を用いた．さらに夫婦関係を構成する 8 要因各々に関連する要因（妊娠と結婚の状態，妊娠中の体調の変化や心配事）の検討は Mann-whitney 検定を用いた．これらの分析には統計ソフト「SPSS11.5.for Windows」を用いた．

9. 倫理的配慮

対象者の権利を保護するために，次のことを対象者に説明し同意を得た．

1) 実施施設には，文書と口頭にて研究の主旨を説明し，文書にて同意を確認する．
2) 研究対象者には，文書を用いて倫理的な配慮について説明し，文書をもって同意を得る．
3) 妻のみ来院している場合は，妻に説明文書と質問紙，同意書を渡し，妻を通して夫に依頼をする．
4) 協力者は無記名とし，データはコンピュータで統計的に処理し，個人が特定できないことを保証する．
5) 研究の参加は自由意志であることを保証する．
6) 研究参加の有無や研究途中での辞退による不利益は生じないことを保証する．
7) 質問紙は夫と妻，別個の封筒に入れ，封印後に回収する．
8) 質問紙は施錠できる部屋で保管，終了後は破棄することを保証する．
9) 研究で得られたデータは匿名で記述し，研究以外には使用しないことを保証する．
10) 使用した尺度について，作成者の許諾を得る．

なお，本研究は札幌医科大学大学院保健医療学研究科倫理審査において承認された研究計画に基づいて行った．

Ⅲ．結果

質問紙を455組の夫婦に配布し，妻236名（回収率53%），夫190名（回収率43%）より回収した．そのうち夫13名（無回答2名，妊娠週数が28週未満11名），妻12名（妊娠週数が28週未満）を除いた妻224名（有効回答率50%），夫177名（有効回答率40%）を有効回答とした．

有効回答のうち，夫のみ回答をしたものはいなかったため，家族構成，世帯収入は妻のデータを用いる．

1．対象者の背景

1）基本的属性（表1）

対象者の平均年齢は，妻29.9歳，夫32.1歳，結婚年齢の平均は妻27.3歳，夫29.4歳であった．妻の最終学歴は，中学校4名（1.8%），高校47名（21.0%），専門学校・短大128名（57.1%），大学・大学院45名（20.1%）であり，専門学校・短大が最も多かった．夫の最終学歴は，中学校3名（1.7%），高校47名（45.1%），高専・専門学校・短大55名（31.1%），大学・大学院70名（39.5%），不明2名（1.1%）であった．

家族構成は，配偶者と二人暮し204名（91.1%），複合家族15名（6.7%），配偶者と別居5名（2.2%）であった．別居の理由は，里帰り，夫の単身赴任，経済的理由が各々1名，不明2名であった．

妻の仕事は，「仕事あり」は，産休中35名を含む62名（27.8%），「仕事なし」161名（71.8%），「不明」1名（0.4%）であった．「仕事あり」のうち，今後退職予定11名，検討中1名であった．「以前は就業していた」は，160名（71.4%）であり，退職理由は妊娠75名，結婚55名であった．退職者の約8割が結婚，妊娠を機会に退職していた．夫の仕事は，「仕事あり」175名（98.9%）であり，「以前は就業をしていたが現在はしていない」2名（1.1%）であった．

夫婦の昨年1年間の世帯年収は，「収入がなかった」1世帯（0.4%），「200万円未満」7世帯（3.1%），「200 - 400万円未満」13世帯（5.8%），「400 - 600万円未満」102世帯（45.5%），「600 - 800万円未満」58世帯（25.9%），「800万円以上」38世帯（17.0%），不明4名（1.8%）であった．

2）結婚と妊娠の状態（表2）

妻の結婚と妊娠の状態は，「妊娠時結婚していた」177名（79.0%），「結婚していなかった」47名（21.0%）であり，2割が結婚前の妊娠であった．「妊娠の希望」は，「希望していた」妻185名（82.6%），夫152名（85.9%），「どちらでもよかった」妻31名（13.8%），夫20名（11.3%），「希望していなかった」妻7名（3.1%），夫5名（2.8%）、妻回答なし1名（0.4%）であった．

表1 基本的属性

	妻（n=224）	夫（n=177）
	平均値± SD（範　囲）	平均値± SD（範　囲）
年齢		
年齢（歳）	29.9 ± 4.1（18 − 39）	32.1 ± 5.3（18 − 48）
結婚年齢（歳）	27.3 ± 3.6（18 − 37）	29.4 ± 4.9（18 − 47）
教育年数（年）	13.9 ± 1.5（9 − 18）	14.2 ± 1.8（9 − 18）
	人数（%）	人数（%）
同居者		
夫と二人暮らし	204（91.1）	160（90.0）
複合家族	15（6.7）	14（7.9）
夫と別居	5（2.2）	3（1.7）
仕事		
あり	62（27.8）	175（98.9）
なし	161（71.8）	2（1.1）
不明	1（0.4）	0（0.0）
年収（万円 / 年）		
収入はなかった	38（17.0）	2（1.1）
200以下	80（35.7）	12（6.8）
200 - 400未満	73（32.6）	83（46.9）
400 - 600未満	30（13.4）	60（33.9）
600 - 800未満	2（0.9）	10（5.6）
800以上	0（0.0）	9（5.1）
不明	1（0.4）	1（0.6）

表2 結婚と妊娠の状態

	妻（n=224）	夫（n=177）
	人数（%）	人数（%）
妊娠の時期		
結婚前の妊娠	47（21.0）	31（17.5）
結婚後の妊娠	177（79.0）	146（82.5）
子どもの希望		
していた	185（82.6）	152（85.9）
していなかった	7（3.1）	5（2.8）
どちらでもよかった	31（13.8）	20（11.3）
不明	1（0.4）	0（0.0）
	平均値± SD（範　囲）	平均値± SD（範　囲）
結婚後の妊娠	n=177	n=146
結婚から妊娠までの期間（年）	2.6 ± 2.4（.1 − 15）	2.5 ± 2.5（.1 − 15）

3）身体的・心理的状態（表3）

健康状態は，妻は「病気あり」46名（20.5%），「なし」178名（79.5%），夫「病気あり」30名（17.0%），「なし」147名（83.0%），「不明」3名（1.7%）であった．妻の妊娠中の異常は，「異常あり」83名（貧血45名，切迫流早産33名，妊娠中毒症2名）であり，そのうち24名（28.9%）が入院治療をしていた．「体調の変化や心配」は妻「あり」179名（79.9%），「なし」43名（19.2%），「不明」（0.9%）であり，夫は「あり」47名（26.6%），「なし」127名（71.8%），「不明」3名（1.7%）であった．

表 3 身体的・心理的状態

	妻（n=224）	夫（n=177）
	人数（%）	人数（%）
健康状態		
病気あり	46（20.5）	30（17.0）
病気なし	178（79.5）	147（83.0）
妊娠の異常		
あり	83（37.1）	
なし	140（62.5）	
不明	1（ 0.4）	
自身の体調の変化や心配		
あり	179（79.9）	47（26.6）
なし	43（19.2）	127（71.8）
不明	2（ 0.9）	3（ 1.7）
配偶者の体調の変化や心配		
あり	68（30.4）	127（71.8）
なし	103（46.0）	31（17.5）
わからない	49（21.9）	17（ 9.6）
不明	4（ 1.8）	2（ 1.1）

2. 夫婦関係を構成する 8 要因の得点

1） 結婚満足度（表 4）

本研究の信頼度係数 Cronbach's α 係数は，妻 .91，夫 .87 であった．

(1) 妻の結婚満足度

現在の結婚満足度は平均 4.5 点であった．満足度の高い群（非常に満足，どちらかといえば満足）と低い群（非常に不満，どちらかといえば不満，どちらともいえない）の 2 群に分けると，満足度の高い群は，194 名（89%），低い群は 24 名（11%）であり，約 9 割の妻が満足感をもっていた．妊娠前と現在の比較では，有意差はなかった．

(2) 夫の結婚満足度

現在の結婚満足度は平均 4.8 点であった．満足度を 2 群に分けてみると，満足度の高い群は 166 名（97.1%），低い群は 5 名（2.9%）であった．妊娠前と現在の比較では，「配偶者との関係の満足」が，現在のほうが妊娠前に比べて有意に高かった（p ＝ .038）．

(3) 妻と夫の結婚満足度の比較

妻と夫を比較では，結婚満足度の得点は夫が妻に比べ有意に高かった（p ＝ .000）．「結婚の満足」,「配偶者への満足」,「配偶者の関係の満足」のいずれも，夫が妻に比べ有意に高かった．（p ＝ .000）．

2） 情緒的関係（表 4）

本研究の信頼度係数 Cronbach's α 係数は，「配偶者からの情緒的支援」妻 .83，夫 .82，「配偶者への情緒的支援」妻 .76，夫 .77，「配偶者への気持ちの伝達」妻 .83，夫 .81 であった．

(1) 妻の情緒的関係

「配偶者への情緒的支援」3.3 点，「配偶者からの情緒的支援」3.4 点，「配偶者への気持ちの伝達」3.5 点であった．妊娠前と現在の比較では，「配偶者からの情緒的支援」（p ＝ .041），「配偶者への気持ちの伝達」（p ＝ .000）が，妊娠前に比べ現在のほうが有意に高かった．

現在の「配偶者からの情緒的支援」と「配偶者への情緒的支援」との間に有意差があった（p ＝ .000）．

(2) 夫の情緒的関係

「配偶者への情緒的支援」3.5 点，「配偶者からの情緒的支援」3.5 点，「配偶者への気持ちの伝達」3.3 点であった．妊娠前と現在の比較では，「配偶者への情緒的支援」（p ＝ .000）が，妊娠前に比べ現在のほうが有意に高かった．

夫は現在の「配偶者からの情緒的支援」と「配偶者への情緒的支援」の間に有意差はなかった（p ＝ .667）．

(3) 妻と夫の情緒的関係の比較

妻と夫の比較では，「配偶者への気持ちの伝達」は，妻が夫より高く（p ＝ .005），「配偶者への情緒的支援」は，夫が妻より高かった（p ＝ .001）．「配偶者からの情緒的支援」は妻と夫の間に有意差はなかった．

3） 意見の一致度と不一致時の対処（表 5）

本研究の意見の一致度の信頼度係数 Cronbach's α 係数は，妻 .75，夫 .83 であった．

(1) 妻の意見の一致度と不一致時の対処

意見の一致度は平均 4.2 点であり，「ほぼ一致」から「どちらかといえば一致している」という回答だった．一致度が最も高い項目は，「家計の取り扱い」,「妻の就労」が各々 4.4 点であり，次いで「大切だと思う目標や物事」,「親とのつきあい」,「自由な時間の過ごし方」,「家事の分担」4.2 点，最も低い項目は「性生活」3.5 点であった．

妊娠前と現在の比較では，全体の一致度に差はなかったが，現在の方が妊娠前に比べて高い項目は，「家事の分担」（p ＝ .050），「家計の取り扱い」（p ＝ .003），「親とのつきあい」（p ＝ .032）であり，低下した項目は「性生活」であった（p ＝ .000）．

意見の不一致時の対処は，「満足する結論」4.2 点，「衝突の回避」3.1 点，「自分の意見を通そうとする」3.1 点，「相手の要求に従う」2.8 点であり，最も多くとられている対処方法は「満足する結論」であった．

(2) 夫の意見の一致度と不一致時の対処

夫の意見の一致度は，平均 4.2 点であり，「ほぼ一致」から「どちらかといえば一致している」という回答だった．一致度が高い項目は，「家計の取り扱い」,「妻の就労」,「大切だと思う目標や物事」が 4.4 点，次いで「親とのつきあい」4.3 点，「自由な時間の過ごし方」4.2 点，「家事の分担」4.1 点，「性生活」3.5 点であり，妻とほぼ同様の順位であった．

妊娠前と現在の比較では，全体の一致度に差はなかったが，妊娠前に比べて現在の方が得点が高い項目は「家事の分担」（p ＝ .000），「家計の取り扱い」（p ＝ .033）であり妻と

表 4 結婚満足度と情緒的関係

	妻			夫			
	平均値± SD		p[a]	平均値± SD		p[a]	p[b]
	妊娠前	現在		妊娠前	現在		
結婚満足度 （範囲 1-5）	4.5 ± .6	4.5 ± .7	ns	4.8 ± .5	4.8 ± .5	ns	.000
結婚の満足	4.5 ± .7	4.5 ± .7	ns	4.8 ± .5	4.8 ± .6	.046	.000
配偶者の満足	4.5 ± .7	4.5 ± .7	ns	4.8 ± .5	4.8 ± .4	ns	.000
配偶者との関係の満足	4.5 ± .7	4.5 ± .8	ns	4.7 ± .6	4.7 ± .5	.038	.000
情緒的関係 （範囲 1-4）							
配偶者への気持ちの伝達	3.4 ± .7	3.5 ± .6	.000	3.3 ± .7	3.3 ± .7	ns	.005
配偶者からの情緒的支援	3.4 ± .6	3.4 ± .6	.041	3.4 ± .6	3.5 ± .6	ns	ns
配偶者への情緒的支援	3.3 ± .5	3.3 ± .5	ns	3.4 ± .6	3.5 ± .5	.000	.001

a：妊娠前後の差（Wilcoxon の符号付検定）　　b：現在の妻と夫の差（Mann-Whitney 検定）

表 5 意見の一致度と不一致時の対処

	妻			夫			
	平均値± SD		p[a]	平均値± SD		p[a]	p[b]
	妊娠前	現在		妊娠前	現在		
意見の一致度 （範囲 1-5）	4.1 ± .7	4.2 ± .6	ns	4.1 ± .8	4.2 ± .8	ns	ns
家事の分担	4.1 ± 1.1	4.2 ± 1.0	.050	4.0 ± 1.3	4.2 ± 1.0	.000	ns
家計の取り扱い	4.3 ± 1.1	4.4 ± .9	.003	4.3 ± 1.1	4.4 ± 1.0	.033	ns
性生活	3.9 ± 1.2	3.5 ± 1.4	.000	4.0 ± 1.2	3.7 ± 1.3	.004	ns
自由な時間の過ごし方	4.2 ± .9	4.2 ± .9	ns	4.1 ± 1.0	4.2 ± .9	ns	ns
親とのつきあい	4.1 ± 1.1	4.2 ± 1.0	.032	4.2 ± 1.0	4.3 ± .9	ns	ns
妻の就労	4.3 ± 1.0	4.4 ± .9	ns	4.3 ± 1.0	4.4 ± 1.0	ns	ns
大切だと思う目標や物事	4.1 ± 1.3	4.2 ± 1.1	ns	4.3 ± 1.0	4.4 ± .9	.017	.011
不一致時の対処 （範囲 1-5）							
満足するような結論を見つけようとする		4.2 ± .8			4.2 ± .9		ns
衝突を避けようとする		3.1 ± 1.3			3.7 ± 1.2		.000
自分の意見を通そうとする		3.1 ± 1.0			3.1 ± 1.2		ns
相手の要求に従う		2.8 ± .8			3.2 ± 1.0		.000

a：妊娠前後の差（Wilcoxon の符号付検定）　　b：現在の妻と夫の差（Mann-Whitney 検定）

表 6 出産育児の会話・会話時間・共同行動

	妻	夫	
	平均値± SD	平均値± SD	p[a]
出産育児の会話 （範囲 1-4）	3.3 ± .7	3.4 ± .7	ns
育児の会話	3.3 ± .9	3.4 ± .8	ns
お腹を触る	3.4 ± .9	3.5 ± .7	ns
出産の会話	3.3 ± .8	3.4 ± .8	ns
会話時間 （範囲 1-4）	3.4 ± .8	3.4 ± .8	ns
共同行動 （範囲 1-6）			
一緒に夕食をとる	5.0 ± 1.3	5.2 ± 1.2	.039
一緒に趣味やレクリエーションを行う	3.1 ± 1.0	3.3 ± 1.5	ns
一緒に買い物に行く	3.3 ± 1.0	3.6 ± 1.0	.020

a：妻と夫の差（Mann-Whitney 検定）

表 7 家事

	妻から見た夫の家事 (n=224)					夫の家事 (n=177)				
	人数 (%)					人数 (%)				
	食事の用意	風呂掃除	洗濯	部屋の掃除	買い物	食事の用意	風呂掃除	洗濯	部屋の掃除	買い物
ほぼ毎日	7(3.1)	13(5.8)	1(.4)	1(.4)	3(1.3)	4(2.3)	16(9.0)	1(0.6)	3(1.7)	5(2.8)
週に4-5回	6(2.7)	2(.9)	2(.9)	0(.0)	6(2.7)	6(3.4)	4(2.3)	3(1.7)	2(1.1)	5(2.8)
週に2-3回	19(8.5)	30(13.4)	20(8.9)	6(2.7)	52(23.2)	18 (10.2)	21(11.9)	12(6.8)	10(5.6)	59(33.3)
週に1回くらい	36(16.1)	77(34.4)	31(13.8)	68(30.4)	125(55.8)	32 (18.1)	66(37.3)	35(19.8)	60(33.9)	90(50.8)
ほとんど行わない	153(68.3)	98(43.8)	168(75.0)	146(65.2)	36(16.1)	115(65.0)	69(39.0)	124(70.1)	100(56.5)	15(8.5)
不明	3(1.3)	4(1.8)	2(.9)	3(1.3)	2(.9)	2(1.1)	1(.6)	2(1.1)	2(1.1)	3(1.7)

同様だった．しかし，「性生活」は妊娠前の方が現在に比べて高く（p＝.004），「大切だと思う目標や物事」は，夫にのみ，現在のほうが妊娠前に比べて有意に高かった（p＝.017）．

意見の不一致時の対処は，「満足する結論」4.2 点，「衝突の回避」3.7 点，「自分の意見を通そうとする」3.1 点，「相手の要求に従う」3.2 点であり，夫は「満足する結論」と「衝突の回避」の対処が多かった．

(3) 妻と夫の意見の一致度と不一致時の対処方法の比較

妻と夫の意見の一致度の得点には，有意差はなかった．項目別では，「大切だと思う目標や物事」が，夫が妻比べも有意に高かった（p＝.011）．

妻と夫の不一致時の対処方法は，「衝突の回避」，「相手の要求に従う」の項目が，夫が妻に比べ有意に高かった（p＝.000）．

4) 出産育児の会話　会話時間　共同行動（表 6）

本研究の出産育児の会話の信頼度係数 Cronbach's α 係数は，妻 .77，夫 .80 であり，共同行動の信頼度係数 Cronbach's α 係数は，妻 .61，夫 .60 であった．

(1) 妻の出産育児の会話　会話時間　共同行動

出産育児の会話は，1 点「めったにしない」2 点，「たまにする」，3 点「ときどきする」，4 点「よくする」の 4 段階で回答を得た．平均値は 3.3 点であり「よくする」から「ときどきする」という回答だった．「育児の会話」，「出産の会話」が各々 3.3 点，「夫がお腹を触る」3.4 点であった．

会話時間は，配偶者との 1 日あたりの平均会話時間であり，1 点「ほとんどなし」，2 点「30 分くらい」，3 点「1 時間くらい」，4 点「2 時間以上」の 4 段階で回答をえた．会話時間が「2 時間以上」121 名（54.0%），「1 時間くらい」74 名（33.0%）195 名（89%），「30 分くらい」24 名（10.7%），「ほとんどなし」4 名（1.8%），不明 1 名（0.5%）であった．

共同行動は，1 点「ほとんどない」，2 点「1 ヶ月に 1 ～ 2 日」，3 点「1 週間に 1 日くらい」，4 点「1 週間に 2 ～ 3 日」，5 点「1 週間に 4 ～ 5 日」，6 点「ほぼ毎日」の 6 段階で回答をえた．「一緒に夕食をとる」が平均 5.0 点であり「1 週間に 4 ～ 5 日」の頻度であった．「一緒に趣味やレクリエーションを行う」3.1 点，「一緒に買い物に行く」3.3 点であり「1 週間に 1 日くらい」の頻度であった．

(2) 夫の出産育児の会話　会話時間　共同行動

妊娠中の出産育児の会話は，平均 3.4 点であり，「よくする」から「ときどきする」という回答だった．項目別では，「育児の話をする」，「出産の話をする」が各々 3.4 点，「妻のお腹を触る」3.5 点であった．

会話時間は一日に「2 時間以上」97 名（54.8%），「1 時間」49 名（27.7%），「30 分くらい」24 名（13.6%），「ほとんどなし」5 名（2.8%），不明 2 名（1.1%）であった．

共同行動は，「一緒に夕食をとる」は平均 5.2 点であり「1 週間に 4 ～ 5 日」の頻度であった．「一緒に趣味やレクリエーションを行う」は 3.3 点，「一緒に買い物に行く」は 3.6 点であり「1 週間に 1 日～ 3 日」の頻度であった．

5) 家事（表 7）

妻の結果は「妻からみた夫の家事」のデータを示し，夫の結果は「夫の家事」のデータを示す．

妻から見た夫の家事の信頼度係数 Cronbach's α 係数は .51，夫の家事は .64 であった．

(1) 妻からみた夫の家事

平均値が最も高い項目は，「食料品・日用品の買い物」2.1 点，次いで「風呂掃除」1.9 点であり「1 週間に 2 ～ 3 回」程度，次いで「食事の用意」1.5 点，「部屋の掃除」，「洗濯」1.4 点であり「1 週間に 1 回～ 2 回」程度であった．

(2) 夫の家事の実態

夫の家事の平均値が最も高い項目は，「食料品・日用品の買い物」1.7 点，「風呂掃除」1.4 点であり「1 週間に 1 ～2回」程度，次いで「食事の用意」，「部屋の掃除」各々 0.7 点，「洗濯」0.4 点であり「ほとんど行わない～ 1 週間に1回」程度であった．

3. 夫婦関係を構成する８要因間の関連（表 8）

1) 妻の夫婦関係を構成する８要因間の関連

図 2 に示したように，夫婦関係を構成する 8 要因の相関関係を検討した結果，妻は 8 要因間の関連において，「結婚満足度」と「夫からの情緒的支援」（r_s=.603）が最も高い相関があり，「結婚満足度」と「意見の一致度」（r_s=.522）および「夫からの情緒的支援」と「意見の一致度」（r_s=.545）は中程度の相関があった．「出産育児の会話」と「夫からの情緒的支援」（r_s=.400），「出産育児の会話」と「会話時間」（r_s=.416）には中程度の相関があった．「妻からみた夫の家事」は他の構成要因との相関はなかった．

2) 夫の夫婦関係を構成する 8 要因間の関連（表 9）

図 3 に示したように，夫婦関係を構成する 8 要因の相関関係を検討した結果，夫も 8 要因間の関連において，「結婚満足度」と「妻からの情緒的支援」（r_s=.500）が最も高い相関があり，これは妻と同様の結果であった．妻は「結婚満足度」と「意見の一致度」は中程度の相関があったが，夫は低い相関（r_s=.364）であり，「夫からの情緒的支援」と「意見の一致度」（r_s=.448）は中程度の相関があった．夫の「出産育児の会話」は，「妻からの情緒的支援」（r_s=.346）および「会話時間」（r_s=.318）と低い相関であり，妻と異なる結果であった．「夫の家事」は，他の構成要因との相関はなかった．

4. 夫婦関係を構成する 8 要因に関連する要因

妻と夫各々の夫婦関係を構成する 8 要因と「妊娠時の結婚の有無」，「妊娠の希望」，「体調の変化や心配」との関連を検討した．

表 8 夫婦関係の構成要因間の関連（妻）

	相関係数						
	1	2	3	4	5	6	7
1. 結婚満足度							
2. 情緒的関係（夫からの情緒的支援）	.603*						
3. 意見の一致度	.522*	.545*					
4. 不一致時の対処（満足する結論）	.269	.290	.335*				
5. 共同行動	.284	.254	.281	.174			
6. 出産育児の会話	.341*	.400*	.346*	.150	.349*		
7. 会話時間	.251	.363*	.316*	.086	.365*	.416*	
8. 妻からみた夫の家事	.260	.222	.136	.086	.247	.257	.130

Spearman の順位相関係数　＊ $r_s \geqq .300$

表 9 夫婦関係の構成要因間の関連（夫）

	相関係数						
	1	2	3	4	5	6	7
1. 結婚満足度							
2. 情緒的関係（妻からの情緒的支援）	.500*						
3. 意見の一致度	.366*	.448*					
4. 不一致時の対処（満足する結論）	.277	.375*	.396*				
5. 共同行動	.145	.216	.226	.104			
6. 出産育児の会話	.332*	.346*	.217	.248	.240		
7. 会話時間	.277	.217	.348*	.121	.384*	.318*	
8. 夫の家事	.063	.041	.045	.058	.250	.283	.080

Spearman の順位相関係数　＊ $r_s \geqq .300$

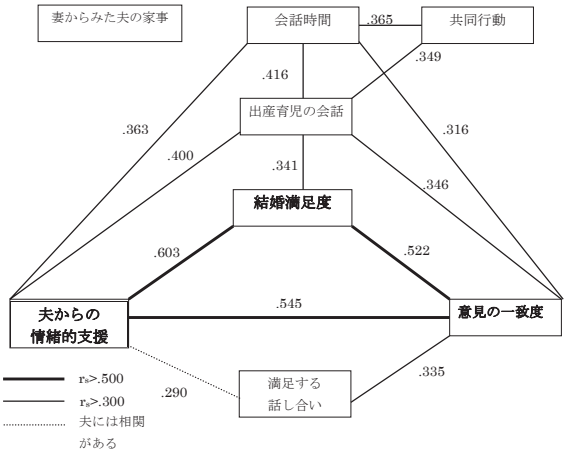

図 2 夫婦関係の構成要因間の関連（妻）

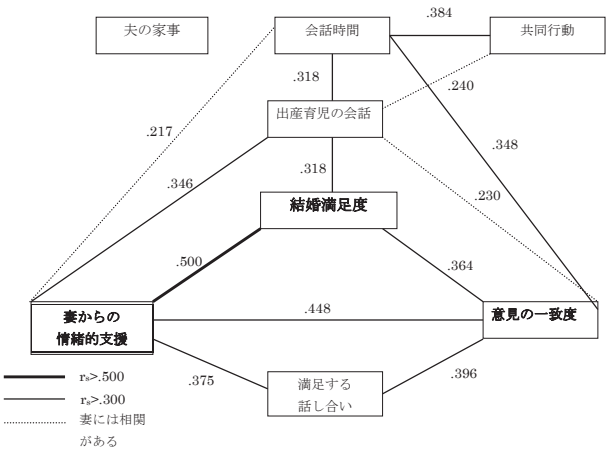

図 3 夫婦関係の構成要因間の関連（夫）

1) 妻の夫婦関係を構成する 8 要因に関連する要因（表 10）

妻の夫婦関係を構成する 8 要因に関連する要因を検討した結果,「妊娠時の結婚の有無」が「結婚満足度」(p=.020),「夫からの情緒的支援」(p=.035),「意見の一致度」(p=.007),「共同行動」(p=.031) と関連があり，いずれも「結婚している群」の得点が高かった.「体調の変化や心配」は「意見の一致度」(p=.010),「会話時間」(p=.030) と関連があり,「体調の変化や心配」がない群の得点が高かった.「妊娠の希望」は 8 要因との関連は有意ではなかった.

2) 夫の夫婦関係を構成する 8 要因に関連する要因（表 11）

夫の夫婦関係を構成する 8 要因に関連する要因を検討した結果,「妊娠の希望」が「結婚満足度」(p=.020),「妻からの情緒的支援」(p=.030) と関連があり,「妊娠を希望している・どちらでもよい群」の得点が高かった．妻に関連があった「妊娠時の結婚の有無」,「体調の変化や心配」は，8 要因との有意な関連はなかった.

表 10 夫婦関係を構成する８要因に関連する要因（妻）

	結婚満足度	情緒的関係	意見の一致度	不一致時の対処	共同行動	出産育児の会話	会話時間	夫の家事
妊娠時の結婚の有無								
妊娠前の結婚	4.2 ± .7*	3.2 ± .7*	3.8 ± .9*	4.1 ± .8	3.5 ± 1.1*	3.4 ± .6	3.3 ± .9	1.7 ± .5
妊娠後の結婚	4.7 ± .8	3.5 ± .6	4.2 ± .6	4.2 ± .9	3.9 ± .9	3.3 ± .7	3.4 ± .7	1.7 ± .5
妊娠の希望								
あり・どちらでもよい	4.5 ± .6	3.4 ± .6	4.2 ± .7	4.2 ± .8	3.8 ± .9	3.3 ± .7	3.4 ± .8	1.7 ± .5
なし	4.3 ± 6	3.4 ± 1.0	3.9 ± .6	3.7 ± 1.4	3.2 ± 1.1	3.4 ± .7	3.3 ± .8	1.8 ± .7
体調の変化や心配								
あり	4.5 ± .7	3.4 ± .6	4.1 ± .2*	4.2 ± .8	3.8 ± .9	3.3 ± .7	3.5 ± .8*	1.7 ± .5
なし	4.6 ± .6	3.5 ± .6	4.5 ± .9	4.3 ± .9	3.7 ± .9	3.4 ± .6	3.6 ± .7	1.5 ± .4

・「情緒的関係」は「情緒的支援（配偶者からの支援）」を、「不一致時の対処」は「満足する結論」を変数として使用
Mann-Whitney 検定　*:p<0. 05

表 11 夫婦関係を構成する８要因に関連する要因（夫）

	結婚満足度	情緒的関係	意見の一致度	不一致時の対処	共同行動	出産育児の会話	会話時間	夫の家事
妊娠時の結婚の有無								
妊娠前の結婚	4.7 ± .5	3.2 ± .8	3.8 ± 1.1	3.9 ± 1.2	3.8 ± 1.2	3.6 ± .5	3.4 ± .8	2.0 ± .8
妊娠後の結婚	4.8 ± .4	3.5 ± .6	4.2 ± .6	4.2 ± .9	4.1 ± .9	3.4 ± .7	3.3±1.0	1.7 ± .5
妊娠の希望								
あり・どちらでもよい	4.8 ± .4*	3.5 ± .5*	4.2 ± .7	1.2 ± .9	4.0 ± .9	3.5 ± .7	3.4 ± .8	1.8 ± .6
なし	4.1 ± .9	2.6 ± 1.1	3.1 ± 1.6	4.4 ± .9	3.7 ± 2.0	3.1 ± .9	2.6±1.5	2.0 ± .6
体調の変化や心配								
あり	4.8 ± .5	3.5 ± .6	4.3 ± .6	4.3 ± .9	4.0 ± .8	3.6 ± .6	3.5 ± .8	1.8 ± .5
なし	4.8 ± .5	3.5 ± .6	4.2 ± .8	4.1 ± 1.0	4.0 ± 1.0	3.4 ± .7	3.4 ± .8	1.8 ± .6

・「情緒的関係」は「情緒的支援（配偶者からの支援）」を、「不一致時の対処」は「満足する結論」を変数として使用
Mann-Whitney 検定　*:p<0. 05

Ⅳ. 考察

1. 夫婦関係の実態

本調査は，夫婦関係を8つの構成要因の得点と8要因間の関連性から検討した．その結果，結婚満足度の得点は，妻4.5点，夫4.8点とどちらも高く，夫の満足度は妻より高かった．サンダース[33]の妊娠末期の結婚満足度の調査においても同様の結果であり，この時期の夫婦は葛藤があるものの，妊娠に対する大きな喜びがあり，配偶者に対して強い愛情を感じていることを報告している．

金ら[34]は，満足度が最も低くなるといわれている中学生・高校生の子どもをもつ夫婦の結婚満足度を調査しており，その結果は妻3.8点，夫3.9点であり，この時期と比べると本調査の妻と夫の結婚満足度は，明らかに高いことがわかる．これまでの結婚満足度に関する調査では，結婚年数とライフステージ（子どもの有無，子どもの年齢）が，それぞれ独自の効果をもって影響し，結婚満足度はU字型のパターンを形成することが確認されており，結婚後5年以内で子どもがいない時期が最も高く，最も低い時期は結婚後21-25年で，末子年齢が13-18歳の時期であると報告されている[31･35]．従って，本調査の対象者のうち，結婚後に妊娠した妻の妊娠までの平均年数が約2.6年であることが，結婚満足度の高さに影響していたと考える．

次に夫婦間の情緒的関係について述べる．本調査では，情緒的関係を「配偶者からの情緒的支援」，「配偶者への情緒的支援」，「配偶者への気持ちの伝達」の観点から検討した．これらの得点は妻と夫共に高かったことから，妊娠末期の夫婦間の情緒的関係は良好な状態であると考える．この時期の情緒的関係の特徴は，妻と夫の「配偶者からの情緒的支援」に差がなかったことである．「配偶者からの情緒的支援」に関する先行研究では，妻と夫の間には支援のギャップがあり，このギャップが妻の結婚満足度やストレスに影響することが指摘されている[31]．そのギャップは，ライフステージを通して，一貫して夫が妻から受けている情緒的支援が，妻が夫から受けている情緒的支援より高いということである．しかし，本調査の結果は，妻と夫各々の「配偶者からの情緒的支援」の得点に差はなかった．

また，平山[36]は，中年期にある妻の情緒的支援について「夫婦間の対称性」（夫婦がお互いの間で同質で同等な関与している状態）の観点から調査しており，その結果，妻は「夫から受けている情緒的支援」より，「自分が夫に行なっている情緒的支援」のほうが多いと認知していることを報告している．しかし，本調査の結果は，妻は自分が「夫からの情緒的支援」のほうが，自分が行なっている「夫への情緒的支援」の得点より有意に高く，「夫からの情緒的支援」のほうが多いと受け止めていると考えられ，これも妊娠期の特徴といえる．また，夫は，「妻への情緒的支援」と「妻から受けている情緒的支援」の得点に差はなく，同量と認知していると考える．これは，夫の「妻への情緒的支援」が妊娠前と現在の比較では，現在の得点が有意に高かったことから，妻が妊娠による体調の変化や生活の変化などに対して夫が妻を気遣い，気持ちを聴くという「妻への情緒的支援」が増加したことによると推察する．

前述したように，先行研究の結果からライフステージの他の時期は，夫婦間の情緒的支援のギャップがあり，それが妻の育児不安や結婚満足度に影響すると報告されていることから[7]，妊娠期の妻と夫の支援の関係が育児期にどのように変化するのか，妊娠中に支援にギャップがない場合は，育児期も同様の関係が持続するのかを含めて検討することが今後の課題となる．

夫婦間の意見の一致度に関する先行研究では，妊娠によって妻の体調の変化や生活の変化が生じることから，夫婦間の役割分担の再調整やそれに伴う意見の不一致を起こしやすく，それが結婚満足度に影響すると報告されている[15]．しかし，本調査の結果では意見の一致度において，妊娠前と現在に差はなかった．その理由として，意見の不一致時の対処において，妻と夫の多くが「満足するような結論を見つけようとする」方法をとっていることが影響していると考える．意見の一致度の詳細では，「家事分担」や「家計の取り扱い」は，妊娠前に比べ現在のほうが高く，妊娠が夫婦間の意見の一致にプラスに影響したと推察する．一方，性生活は，妊娠前から他の項目に比較して一致度が低く，妊娠後に更に低下しており，性生活に対する不満感が妻と夫にあると考える．この背景には妊娠によって性生活が影響を受けることや，性生活について夫婦間で十分に話し合われてないことが関連していると考える．本調査では，不一致の内容は把握できなかったが，妊娠中の性生活は切迫流早産や夫婦間の心理的な満足感との関連も報告されており[37]，妊娠中の性生活に関する支援の必要性が示唆された．

夫婦関係を構成する要因間の関連では，妻と夫共に「結婚満足度」と「配偶者からの情緒的支援」に高い関連があり，この結果は，稲葉[31]，末盛[35]らの結果と同様であった．「情緒的関係」と「結婚満足度」の関連を詳細にみていくと，夫は妻の妊娠によって「妻への情緒的支援」が増加し負担感が増したと考えたが，「結婚満足度」の低下はなかった．この背景には，「妻から夫への情緒的支援」が妊娠前と現在において変化しなかったこと，夫は「妻との意見の一致度」に関して，「大切だと思う目標や物事」が妊娠前に比べ現在高いと認知していたことから，妊娠によって親になるという夫婦共通の目標をもつことができ，それが夫にとって妻との一体感や

結婚満足感をもたらすことが推察された．

「結婚満足度」と「意見の一致度」の関連は，夫より妻においてその関連性が高かったことから，妻にとって夫との意見の一致が結婚満足度を高める重要な要因であると考える．さらに意見の不一致時の対処では，妻と夫のいずれも「満足するような結論を見つけようとする」が最も多くとっている対処方法であり，この要因は意見の一致度と関連していた．ベルスキー[17]は，妻と夫の間に生じる様々な考えや不一致を納得する形で解決することは，意見の一致だけではなく，相手への共感をもたらすことや二人に新しい一体感や家族意識をもたらすこと，妻と夫がともに成長している，それも同じ方向に成長しているという大きな満足感が生じると述べており，本研究においても意見の不一致時の対処として「満足する結論を見つけようとする」対処方法を用いることで，夫婦間の意見の一致をもたらし，それが結婚満足感を高めることにつながったと推察する．

今回の調査において妊娠末期の妻と夫の結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度得点が高かった背景として，調査対象者のほとんどが妊娠を希望していた夫婦であり，夫婦間のコミュニケーションが良好であったことが影響したと考える．本調査の結果，夫が妻のお腹を触る行動や出産育児の会話は頻繁に行なわれており，会話時間[38]や共同行動[39]，夫の家事の頻度[40-42]は，ライフステージの他の時期に比べて高かった．筆者ら[43]の先行研究の結果から，妊娠末期の夫婦間の会話は，妻の身体や子どものことなどが中心となり，この会話によってお互いに対する新たな発見があり，妊娠の喜びを実感していた．また，夫は妻の体調を心配してできるだけ早く帰宅したり，一緒に買い物に行ったり，風呂掃除などの家事支援をしていた．このことから，妊娠によって，夫婦の会話や共同行動など夫婦間のコミュニケーションの機会が増えたことが，お互いの理解や夫から妻への気遣いにつながり，結婚満足度，情緒的関係，意見の一致度に影響したと推察する．

2．夫婦関係と関連する要因

夫婦関係を構成する8要因に関連する要因を検討した結果，妻は「妊娠時の結婚の有無」が「結婚満足度」と関連があり，「結婚している群」の得点が高かった．先行研究において，結婚後の期間が「結婚満足度」に関連しているは既に述べたが，本調査の結果，結婚5年以内であっても，結婚前に妊娠した場合の妻の結婚満足度は，結婚後に妊娠したものより有意に低いことがわかった．稲葉[31]は，妻の結婚満足度が結婚当初より夫に比べて低く，その要因として結婚及び夫婦関係自体が女性に不利な構造をもっていることを指摘している．本調査の結果においても，妻の結婚満足度が夫に比べ有意に低かったことから，夫に比べ妻において結婚の有無が妻の結婚満足度に及ぼす影響が大きく，これは結婚前に妊娠した妻にとって，結婚と妊娠というライフイベントが同時に起こることがストレスの要因となり，結婚満足度に影響したと考える．さらに「妊娠時の結婚の有無」は，「夫からの情緒的支援」,「意見の一致度」,「共同行動」とも関連しており，結婚前の妊娠は妊娠期の夫婦関係を築くうえで，リスク要因になると推察された．

一方，夫については「妊娠時の結婚の有無」と「結婚満足度」の有意な関連はなかったが，「妊娠の希望」が「結婚満足度」，「妻からの情緒的支援」と関連があったことから，夫にとって，希望しない妊娠が夫婦関係を築くうえでのリスク要因になると考えられ，夫婦関係に関連する要因が妻と夫では異なっていることから，妻と夫の違いを考慮した支援の必要性が示唆された．

Ⅴ．看護への示唆と本研究の限界

本調査では，夫婦関係の実態を8つの構成要因から検討した．その結果，結婚満足度は妻と夫共に高く，他の要因もいずれも高い得点であったことから，妊娠末期の夫婦関係は良好な状態であると推察する．さらに妻と夫の結婚満足度と配偶者からの情緒的支援は他の要因に比べて高い関連があり，妊娠末期の夫婦関係において中核となる要因であり，夫婦間の情緒的支援に視点をおいて対象者を理解し，支援することの重要性が示唆された．また，妻にとって「妊娠時に結婚しているか否か」，夫にとって「子どもの希望」が夫婦関係を築くうえでの重要な因子と捉え，妻と夫の違いを考慮した支援の必要性が示唆された．

研究の限界は，妊娠末期の時期に回想的なデータを含んでいること，対象者のほとんどが妊娠を希望していた夫婦であったことである．また，回収率が約5割であり，回収できた集団の特徴が結婚満足度が高い集団であったと考えられること，夫への調査依頼をした段階で夫婦の関係性に問題がある場合は，妻からの調査依頼時に同意しない可能性がはらんでいたことである．今後の課題は，夫婦をひとつの単位としてペアデータで分析することによって，夫婦間の認知の違いなどを含め夫婦関係の実態を検討すること，夫婦間のストレスが増大するといわれている育児期までの縦断的な調査を行ない，妊娠中の夫婦関係の良好さが妊娠による一時的な状態であるのか，育児期にも継続するのかを検討し，家族形成の早期の段階である妊娠期から育児期にある夫婦の具体的な援助を検討することである．

Ⅵ．結論

本調査では，妊娠末期にある妻224名，夫177名に対し，

無記名自記式質問紙調査を行い，夫婦関係を８つの構成要因から検討した．その結果，以下のことが確認された．

1.「結婚満足度」の得点は，夫の満足度が妻に比較して有意に高かった．
2.「配偶者からの情緒的支援」の得点は，妻と夫に有意差はなかった．
3. 夫婦関係を構成する８要因間の関連性は，妻と夫いずれも「結婚満足度」と「配偶者からの情緒的支援」が他の要因に比べて高い相関があり，妊娠末期の夫婦関係において中核となる要因であり，夫婦間の情緒的支援に視点をおいた援助の重要性が示唆された．
4. 夫婦関係を構成する８要因に関連する要因は，妻は「結婚満足度」,「夫からの情緒的支援」,「意見の一致度」,「共同行動」に「妊娠時の結婚の有無」が関連していた．一方，夫の「結婚満足度」,「妻からの情緒的支援」には「妊娠の希望」が関連しており，夫婦関係に影響する要因が妻と夫では異なっていることが示唆された．

謝辞

本研究の主旨をご理解いただき，お忙しい中，研究へのご協力を承諾してくださいました各施設の看護部長様はじめスタッフの皆様，また質問紙に答えてくださいましたご夫婦の皆様に心より感謝いたします．

研究をすすめ，まとめるにあたり丁寧にご指導いただきました天使大学丸山知子学長ならびに札幌医科大学保健医療学部片倉洋子准教授に感謝申し上げます．本研究は 2006 年札幌医科大学大学院保健医療学研究科修士課程に提出した修士論文の一部に加筆・修正した．

文献

1) 新藤幸恵・和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア．東京，医学書院，12-20,1990
2) 丸山知子・吉田安子・杉山厚子・須藤桃代：妊娠期・出産後 2 年間の女性の心理・社会的状態に関する調査 第1報　妊婦の心理・社会的状態．日本女性心身医学会雑誌 6 (1)：93-99，2001
3) 松岡治子・行田智子・今関節子・横田正夫：妊娠期・産褥期・育児期の母親の不安について―日本版 STAI を用いた横断的研究―．母性衛生 43(1)：12-17，2002
4) 岩田銀子・伊藤久美子・柳原真知子・三田村保・森谷きよし：妊婦の情動に対するソーシャルサポート効果の検討（第 1 報）夫のサポートと不安の関連に焦点を当てて．看護総合科学研究会誌 4 (2)：15-27，2001
5) 大日向雅美：母性の研究．東京：川島書店，pp.71-105，1988
6) 数井みゆき・無藤隆・園田菜摘：子どもの発達と母子関係・夫婦関係―幼児をもつ家族について―．発達心理学研究 7(1)：31-44，1996
7) 脇田満里子・小島康夫・入澤みち子：妊娠・出産が母親の心理に及ぼす影響―夫からのサポートに着目して―．母性衛生 44(2)：244-249，2003
8) 大北美穂・牧野裕子・藤沢洋子：妊娠・育児期における妻の夫への期待と夫の行動．大阪府立看護大学紀要 5(1)：27-39，1999
9) 尾形和夫・宮下一博：父親の協力的かかわりと母親のストレス，子どもの社会的発達とおよび父親の成長．家族心理学研究 13(2)：87-102，1999
10) 光田咲子・村上明子：初めて子どもを持つ父親の育児観．母性衛生 43(1)：67-72，2002
11) 小林益江：妻の心身期から父親準備　胎児画像・胎動とジェンダー特性から．母性衛生 43 (2)：274-282，2002
12) 牧野カツコ：コラム②男性不在の心理学．柏木惠子・高橋惠子編，心理学とジェンダー―学習と研究のために―．東京：有斐閣，pp.37，2003
13) 林ひろみ：初めて児の誕生にともなう父親役割行動の調整過程に関する研究．日本母性看護学会誌 4(1)：30-37，2004
14) 田中恵子：妊娠期の夫の身体的・心理的変化．母性衛生 43 (2)：271-282，2002
15) 安次嶺佳子訳:子どもをもつと夫婦に何が起こるか．東京:草思社，1995
16) K nauth D: Predictor of Parental Sense of Competence For The Couple During The Transition to Parenthood. Research of Nursing and Health 23:496-509, 2000.
17) Sonja P, Agnes V, Heidi S, Werner S, Dieter B, Kai V: Parental Psychopathology, Marital Quality and the Transition to Parenthood.American Journal of Orthopsychiatry 73(1) : 55-64, 2003
18) Worthington E,Beverley G: The Marriage Relationship During the Transition to Parenthood. Journal of Family Issues 7:443-473, 1986
19) 柏木惠子：家族心理学―社会変動・発達・ジェンダーの視点―．東京：東京大学出版，2003
20) 諸井克英：夫婦関係学への誘い―揺れ動く夫婦関係―．東京：ナカニシヤ出版，2003
21) 東洋・柏木惠子編：社会と家族の心理学．東京：ミネルヴァ書房，1999
22) 柏木惠子編：結婚・家族の心理学の心理学．東京：ミネルヴァ書房，1998

23) Lock J, Wallance K: Short Marital Adjustment and Prediction Tests : Their reliability and validity. Marriage and Family Living 21 : 251-255, 1959
24) Spanier G: Measuring dyadic adjustment new scales for assessing the quality of marriage and similar dyads. Journal of Marriage and the Family 42 : 825-939, 1976
25) Braiker H, Kelly H: Conflict in the development of close relationships.In Burgess R, Huston T(Eds),Social Exchange and Developing Relationship.New York: Academic Press, 1979
26) Fincham F, Bradbury T: The assessment of marital quality-a reevaluation-.Journal of Marriage and the Family 49:797‐809, 1987
27) Anderson A, Candyce R, Schumm W: Percieved Marital Quality and Family Life-cycle Categories : A Further Analysis. Journal of Marriage and the Family 45:127-139, 1983
28) White K: Determinants of Spousal Interaction : Marital Structure or Marital Happiness : Journal of Marriage and the Family 45:511-519, 1983
29) Schumm R, Paff-Bergen A, Hatch C, Odtoca C, Copeland M, Meens D & Bugaighis A: Concurrent and discriminate validity of the Kansas Marital Satisfaction Scale.Journal of Marriage and the Family 48: 381-387. 1986
30) 菅原ますみ・詫摩紀子：夫婦間の親密性の評価ー自記入式夫婦関係尺度についてー．精神診断学 8(2)：155-166,1997
31) 稲葉昭英：有配偶者の心理的ディストレス．総合都市研究 56：93-111,1995
32) 稲葉昭英：夫婦関係の発達的変化．渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編，現代家族の構造と変容ー全国家族調査〔NFRJ98〕による計量分析．東京：東京大学出版会，pp.261-276，2004
33) Saunders B, Robins E: Changes in the marital relationship during the first pregnancy . Health Care for Women International 8: 361-77 , 1987
34) 金恩美・木村汎：妻の就労が夫婦の家事分担度と意思決定度を介して日本人・韓国人夫婦の結婚満足度に与える影響ー自営業・非就労妻の場合との比較．家族関係学 14：53-61,1995
35) 末盛慶：夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足度．家族社会学 11：71-82,1999
36) 平山順子：中年期夫婦の情緒的関係ー妻からみた情緒的ケアの夫婦間対称性．家族心理学研究 16(2)：1-12, 2002
37) 中元めぐみ：妊娠中の性生活と切迫早産に関する関連要因の検討．母性衛生 45(4)：471-479,2005
38) 渡邉タミ子・鈴木奈緒・長島純子・横森愛子・茂手木明美・比江島欣慎：父親の育児協力・夫婦の対話と母親の育児満足度との関連性．山梨医科大学紀要 18:47-53,2001
39) 木下英二：結婚満足度を規定するもの．渡辺秀樹・稲葉昭英・嶋崎尚子編，現代家族の構造と変容ー全国家族調査〔NFRJ98〕による計量分析．東京:東京大学出版会，pp.277-291，2004
40) 松田茂樹：男性の家事参加．渡辺秀樹，稲葉昭英他編．現代家族の構造と変容ー全国家族調査〔NFRJ98〕による計量分析ー．東京：東京大学出版会，pp.175-189，2004
41) 古田恵子・大村いずみ・堀田法子・生田克夫・松田美恵：夫婦の役割意識と生活時間の変化について，妊娠・産褥期における検討．愛知母性衛生学会 18：37-43，2000
42) 大和礼子：夫の家事参加は妻の結婚満足感を高めるか?ー妻の世帯収入貢献度ーによる比較．ソシオロジスト 46：3-20，2001
43) 渡辺由加利・正岡経子・井上由紀子・茎津智子：夫婦の妊娠・出産に伴う体験に関する質的研究．科学研究費補助金　基盤研究 C(2)　研究成果報告書：2003